「家永文庫」のこと

中国研究科博士課程　湯 原　健 一

2007 年、中国へ留学し、南開大学日本研究院へ１年間お世話になった。日本研究院は、中国有数の日本研究機関である。研究棟には、研究院所属教員の研究室や講義などを行う教室が備えられている。また、研究棟の東側半分の１階と２階に、日本語資料が納められている資料室が併設されていた。

資料室の蔵書は、南開大学教授兪辛焞氏の蔵書をもとにして、日本語文献が集められている。そうした蔵書のなかで、資料室の中核となっているのが「家永文庫」と名付けられた、故家永三郎氏の旧蔵書である。

2004 年に、家永家から寄贈された蔵書は、資料室の書庫の半分を占める膨大な量である。資料室の職員によれば、日本研究院に寄贈された蔵書は約１万３千冊。送られてきた段ボール数は約 500 箱あまりだったという。受け入れ当時は、文字通り「汗牛充棟」という状況だったらしい。

家永文庫には、氏の専門分野である日本古代史に限らず広汎な範囲の書籍が納められていた。驚くべきことは書架に立ち、手にした本のほとんどに赤鉛筆で線が引かれているところである。家永文庫を閲覧する度に、おそらく定規を使って一本一本引かれたであろう赤鉛筆の線から家永氏の几帳面な性格が表れており、自分自身の襟を正さねばという思いにとらわれた。

さて最後に、家永文庫の隣には、もう一つの文庫がある。それは元愛知大学教授であり、いわゆる「家永教科書裁判」で証人となった故江口圭一氏の文庫である。二人のつながりを物語るように江口氏の蔵書には、家永氏の、家永氏の蔵書には江口氏の著書がそれぞれ納められ、互いの著書に「謹呈・著者」と自署されている箇所があったのを見つけ、二人の学究の静かな交流の痕跡が垣間見えた気がした。

図書館 私の揺籃 －その今昔－

文学研究科研究生　前 田　豊 子

開架室の書棚や書庫にびっしり詰っている本の林に足を踏み入れると些か圧倒されるけれども、私は心底から落ち着き嬉しくなる。

第２次世界大戦の頃学生であった私は戦況の厳しくなる前に、学校図書館や数少ない公立図書館を度々訪れた。当時は館内で読む本を借りるのに、目録カードを繰って請求用紙に書名等を記入しカウンターに提出、係員が何名分も纏めて書庫に入って探してもらう方式であった。かなりの時間待っても貸出中等で希望の本が一度で手元に来ることは珍しく、何度も別の本を請求して漸く一冊を手にする状況であった。館外貸出はまた複雑な手続きを必要としたものだった。

敗戦の数年後図書館に開架式が採用され、自由に書架で本を探すことができるようになった時の嬉しさは忘れられない。

現在のコンピューターで自由に広範に検索できることは私には驚きそのものである。愛知大学の学内のことだけに限って考えても、豊橋で借りた本も車道校舎での返却を認めていただけることは、名古屋に住む私には誠に便利でありがたいことである。日進月歩の電子情報関連の技術に囲まれている現在、昔人間の私にはうまく利用しきれないけれども、それらも含めて図書館の恩恵を目いっぱい享受していることは間違いない。

本好きの、そして晩学の私は若い時期から今日まで、測り知れないほど数多くの本に、そして図書館に育まれてきたと言っても過言ではない。図書館は私の「心の揺籃」であり、限りなく感謝している。

電子情報全盛で、書籍離れも言われているけれども、それらの情報の活用と併せて、多くの人に紙の書籍や図書館もこれまで以上に忘れずに活用して欲しいと思うことしきりの昨今である。